



NPO法人 府中かんきょう市民の会会報
 2016年 夏号 7月13日発行 通巻61号
 発行人 梅沢 みどり (府中市紅葉丘)
 TEL 042-351-0689
 編集人 葛西 利武

第11回 田んぼの学校 親子が力をあわせ、楽しく田植え



田植え開始!

府中東高生、農工大生が生徒をサポート

■9:40 田植え (写真⑥)

市民の会スタッフが実演指導を行い、晴天の下、田植えが始まりました。ほとんどの生徒さんが、初めての田んぼ体験でしたので、「ヌルヌルだ、足がぬけない」などの賑やかな声があちこちで上がりました。

子どもと一緒に田んぼに入った保護者が、苗を子どもに渡し、子どもが植えるという、親子がしっかりと結びついた田植えとなりました。植える苗が足りなくなると、府中東高、農工大の学生さんが補充し保護者に手渡すなど、力をあわせることの大切さを、皆が実感しました。最初は、尻もちをついて泥だらけになった生徒さんも、次第に慣れ、予定より早く田植を終えることが出来ました。

■11:00 田んぼの生き物の説明とバケツ稲の指導

田植えの後、専門家スタッフによる田んぼの生き物について、わかりやすい説明があり、さまざまな質問が出されました。続いて、家庭で行うバケツ稲の育て方の指導があり、苗、肥料、土が配られ、11時30分散散となりました。

参加された生徒さん、保護者からは、楽しく勉強になったとの感想がたくさん寄せられました。当日は、JCOM東京の取材があり、後日、TV放映されました。

第11回田んぼの学校の開校式・田植えが5月29日(日)に、生徒43人(全員出席)、保護者33人、スタッフなど113名が出席し、農工大本町農場で行われました。今年も、府中東高校生物部10名、農工大学生サークル「耕地の会」4名の若い皆さんがスタッフに加わり、元気で笑顔あふれる田植えとなりました。
 なお、田んぼの学校は、NPO法人府中かんきょう市民の会が、府中市から委託され、国立大学法人東京農工大学のご協力を頂き、実施しています。

開校式・田植えに113名出席

今年の田んぼの学校には、84名の応募があり、抽選により43名が入学されました。小学生(3年生以下37名)から76歳までと、幅広い方々が参加されています。

■9:00 開校式

市民の会の梅沢理事長の開校の挨拶に続き、東京農工大学の川大先生、本林先生から、府中の田んぼの歴史やお米についての「ミニ授業」がありました。次に、府中市環境政策課長前島様から挨拶、市民の会から「稲の一年」と



梅沢みどり新理事長(左)のご挨拶

「田植えの仕方」についての説明があり、開校式の最後に、恒例の準備体操(ピョピョさん体操)を、参加者全員で元気に行い、田植えに移りました。



バケツ稲用の苗、肥料、土の手渡し

田んぼの学校、収穫祭までのスケジュール

田んぼの学校は、7月に生育観察・草取り・生き物さがし、9月に稲刈り・ハサかけ、10月には脱穀・粃すりを行ないます。スタッフは、随時、草取りや防鳥ネット張りなど行い、稲の成育を見守ります。

11月6日の収穫祭・修了式では、収穫したお米でオニギリをつくり、食事会を行なう予定です。(村崎 啓二)

府中市に 意見提出

府中基地跡地の土地活用に向けて

はじめに

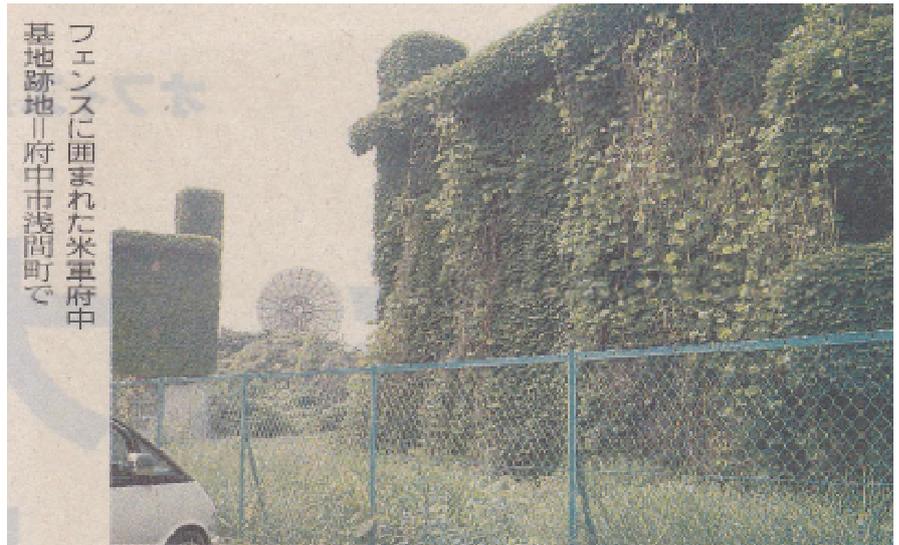
府中市浅間町に残されている「米軍府中基地跡地(以下、留保地)」について、平成15年に国は民間企業に売却する方針を示しました(㊤当時の新聞参照)。この留保地は約15.5ヘクタールあり、周囲は住宅や道路になっており、現在は財務省関東財務局東京財務事務所立川出張所が管理しています。

国に返還されてから約半世紀以上利用されていない「都市圏に残された貴重な緑地空間」であり、NPO法人府中かんきょう市民の会(以下、当会)は、平成15年頃から、府中市に対して、この留保地の活用について種々意見・提案を提出してまいりました。

このたび、平成27年12月に新たに留保地の土地活用の基本方針が提示され、改めて意見募集がありましたので、当会として過去提出した意見・要望を踏まえて、再度市に提出いたしましたので、紹介したいと思います。

今までの経緯

当時の利用計画は留保地を3分割し、国の機関である「国立医薬品食品衛生研究所(以下、衛生研)」と「国家公務員宿舎」、そして「府中市の公園計画」がありました。



平成15年6月10日付け朝日新聞

ところが衛生研の移転計画に地元住民や市民団体が反対したため、計画が白紙撤回されました。さらに公務員宿舎の建設についても、国会内で不要論があり、3分割の利用計画は全て白紙となり、現在に至っております。

今回示された市の基本方針案は(平成28年2月)、今後の利用計画策定に向けて、その前段階としてこれまでの経過や現状と課題の分析を行い、留保地の活用に向けて基本的な考え方をまとめたもので、具体的な利用計画はこれから策定することになっています。

以下に、当会の5点に及ぶ基本的な考え方をしめします。

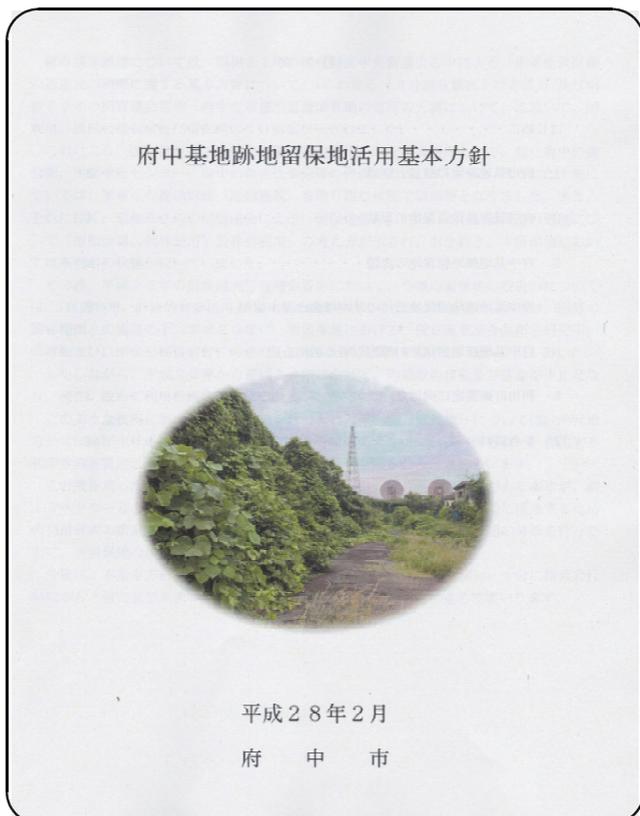
1 留保地を新たな緑地空間として活用する提案

この留保地は、米軍から国に返還後、約60年から70年間自然のまま放置され、市内に残された大規模で貴重な緑地空間であり、「100年先を見通した“まちづくり”の集大成」に位置付けた計画づくりを提案しました。

留保地周辺は、浅間山や府中の森公園など豊かな緑と市民ホール、美術館、生涯学習センターなどの文化教養施設が立地する場所であり、留保地の土地活用にとどまらず、府中市が目指す魅力ある“まちづくり”への波及効果を視野に入れることが重要と考えられます。

「魅力的なまち」とは、誰もがイメージできる「顔となる場所」と、住む人にとって暮らし易さを支える場所が、バランス良く備わっている“まち”のことだと思います。

まちの魅力をつくる要素としては、商業施設の集積や歴史的資産など種々ありますが、中でも重要な役割を持っているものは「緑」です。留保地の緑は、浅間山・府中の森公園の緑と一体的に考え、地域の緑の規模と質を高めることが、府中市の魅力ある“まちづくり”にとって重要な役割を持っていると考えます。



基本方針として示された冊子の表紙

2 留保地を周辺の景観形成に寄与する 「みどり空間」の担保として位置づける要望

市民への意識調査によると、府中市は緑が多いイメージで捉えられていることがわかります。その理由は、府中駅や府中本町の駅前、芸術の森など人が集まる場所に緑が圧倒的に多いこと、府中崖線、国分寺崖線、多摩丘陵などの立体的な緑があることからです。つまり、目に見える緑が多いというわけです。

しかし、ここで着目すべきことは、豊かな緑の資源となっている国分寺崖線や多摩丘陵の緑は他市の緑であり、府中市にとっては借景の緑であることに他なりません。

府中市の緑被率は27.6%に過ぎず、決して多いとはいえません。緑の少ない府中市にあって、市民が緑が多いというイメージが持てるのは、他市の緑の恩恵をうけている結果に他ならないのです。

府中市の緑を守ることは、ひいては武蔵野のイメージを継承する地域の姿を守ることもあることを強く認識する必要があります。したがって、浅間山地区の一端を担う基地跡地の留保地の緑を残すことは、府中市のみならず、周辺市にとっても重要な意味を持っているといえます。

3 留保地でファミリーが一日過ごせる レクリエーションエリアの創出を要望

浅間山地域は、武蔵野の雑木林のイメージを残した浅間山、豊かな緑に覆われた多磨霊園、レクリエーション拠点として多くの利用がある府中の森公園など、市民の安らぎと憩いの場所として市民生活の豊かさを支える空間となっています。

市民生活を支える緑は、目に見えるのみならず利用を通して市民の日常生活のストレスを和らげること、子どもの教育や親子の触れ合いの場となることなど、多様な暮らしの選択肢をつくる基盤となり、浅間山と府中の森公園および留保地がその役割を担うことになります。

現在、浅間山と府中森公園の間は、道路でつながっている状況ですが、留保地が利用できるようになると、さらに、浅間山—留保地—府中の森公園の具体的な連携が図られることによって、ファミリーが弁当を持って一日の時間を費やせるレクリエーション空間が生まれます。

4 留保地の生態系調査を行い、 希少動植物の保護と保全を提言

前述のように、この留保地は半世紀以上も自然のまま保存されてきた経緯もあり、貴重な生態系が

保存されています。衛生研の移転計画時に、当会および環境市民団体は、衛生研に対して移転計画地の生態系調査を要望し、平成20年10月から平成21年7月までの期間で専門調査機関により、生態系調査が行われました。

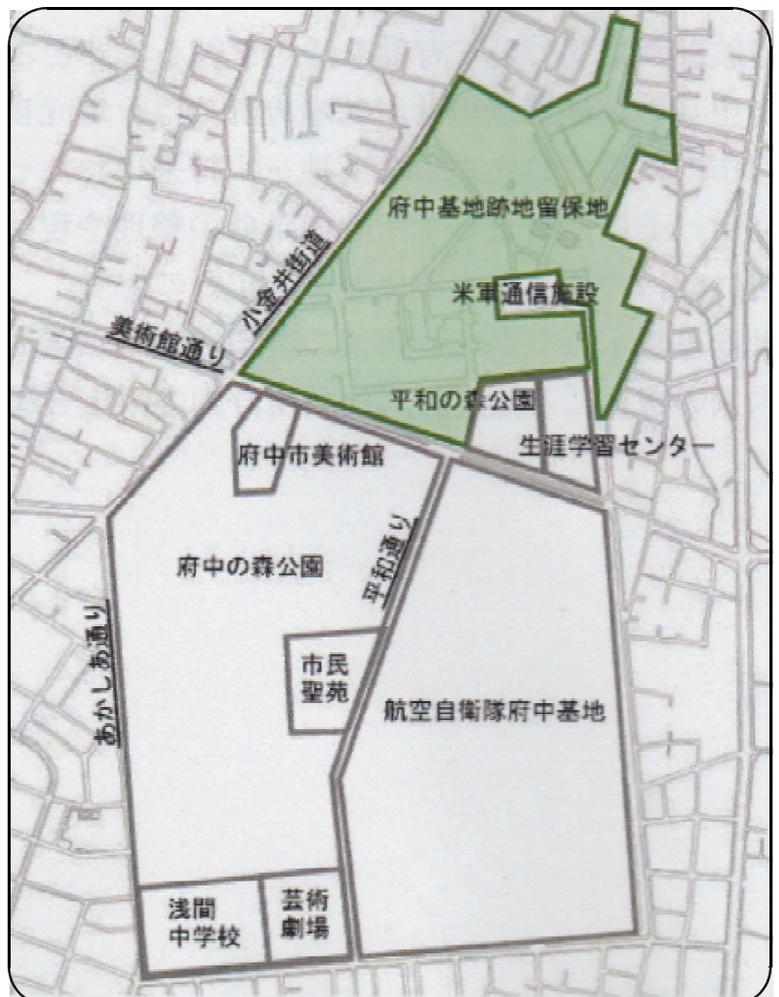
その結果、この地には、希少種の動植物が生息していることが判明し、これらの保護と保存について、調査機関（株）環境管理センターより、貴重な提言がありました。

是非、この貴重な提言を真摯に受けとめ、可能な限り提言内容を尊重した措置を講じるとともに、生物多様性の維持・保全を行うよう、市へ要望しました。

5 留保地の活用計画策定にあたり、 市民を含めた協議会の設置を要望

この度の府中市の留保地土地活用計画の基本方針策定は、市職員のプロジェクトチームで行われておりました。今後策定する具体的な計画づくりは、是非、専門家や地元住民、環境市民団体などを構成員とした協議会を設置して進めるよう要望しました。

計画の素案策定段階から広く市民に公表し、多くの市民の要望を取り入れることを前提とした市民参加型の協議会となるよう提案いたしました。（竹内 章）



府中基地跡地 留保地の位置図(緑色の部分)

第6回わき水まつり
パート1 講演会

府中崖線の自然を学ぼう

-崖線(ハケ)の由来と生態系について-

日時 6月26日(日) 13:30~15:30
 会場 西府文化センター講堂(3F)
 演題 府中崖線の自然を学ぼう
 一崖線(ハケ)の由来と生態系について
 講師 竹内 章(府中市環境保全活動センター運営委員)
 後援 府中市 公園緑地課
 主催 NPO法人府中かんきょう市民の会
 ○平成28年度の活動は、「東京ガス環境おうえん基金」から助成金を受けています。



小西信生氏主催の司会で進行する講演会



右の花の拡大写真。テッセン、アップルセイジ、ハンゲショウなど。元会員の黒崎啓さんの飾りつけ



梅沢みどり理事長の主催者挨拶。右が竹内章講師

西府わき水まつり講演会を、6月26日(日)西府文化センターで開催しました。

今回の講演のテーマは「府中崖線の自然を学ぼう」、サブタイトルとして「崖線の由来と生態系について」と題して、講師は府中市環境保全活動センター運営委員の竹内章氏にお願いしました。

竹内氏は西府崖線(※)のそばの分梅町に子どもの頃から住み、昨年度までは当会の理事長を8年間務められました。さかのぼれば、市民の会の発足直後からも会員を続けている環境保全活動のベテランです。

また、行政の側から、西府崖線の状況をより具体的に説明していただくために、公園緑地課の角倉道晴課長にも解説をお願いしました。したがって、府中市が最も力をいれている市民・NPO・行政が協力する「市民協働」のモデルといえます。※府中崖線の西端部を特に西府崖線と呼びます。

今回の講演会参加人数は38人、いずれも環境や西府のまちづくりに関心のある市民の方が中心で、市広報やハケ下の看板を見たりしての参加です。

講演会は約2時間、プロジェクターによるビジュアルな解説と、竹内講師と角倉課長からの説明後の質疑応答で大いに盛り上がりました。

講演会終了後の懇談会にも多くの参加者が残っていただき、懇親を深めました。



講演会終了後の懇談会

講演会は、府中崖線は多摩川が長い時間をかけて作り出した河岸段丘であることの解説から、急なガケをガケくずれから防ぐために基礎工事が行なわれていること、以前からの湧水や自然の草木や魚・虫・鳥などの生きものが、市街化が進む中で人間社会と共生していること、から始まり、府中かんきょう市民の会の活動にまで及びました。

私たち府中かんきょう市民の会が以前からこうした自然の保全の必要性を提言し、調査や清掃活動、2年前の府中まちなかきらら(アダプト制度)の発足後は樹木名札付けや、シジュウカラの巣箱取付けなどを、市民ボランティア活動として行なっていることも説明しました。

参加者からいただいたアンケートの自由記入欄などを見ると、概ね好意的な評価をいただきました。「200円の資料代を払ったが、十分に元がとれた。いい話だった」とのうれしい声もありました。

今後も、こうした自然を守り、共生していく道を地域のみならずと一緒に進めていきたいものです。(小西 信生)



質問を受ける角倉公園緑地課課長(左)と竹内章講師(右)

援農ボランティア活動と 収穫祭を通じて農業に思うこと

援農作業

援農を始めて4年になる。作業は、草取り、苗植え、種まき、収穫後の片づけ等々収穫や施肥以外の全てだ。一番多い作業は、トマトの後片付けで、次いで草取りである。殆どがハウス栽培なので、ホケザ・スペルヒユ・アカタバミ・ナスナ等の雑草の成長が極めて速い。

トマトの片づけは、当初はイライラが募ったものだ。ネットが張られた状態で網目を通してハサミを入れて枝を切り、網目から引っこ抜くのだが、網が邪魔して切りたい枝にハサミが届かない。手を入れ変えることしばしばである。また、切った枝は、青いうちはそれほどでもないが、枯れた硬い枝は、枝の伸びる方向即ち、根の方向から網目を通さないと殆どの場合網に引っ掛かって抜き取ることができない。根元の方から引っ張りなおすこととなる。

援農に関わるようになって、農業に関心が湧き、「次世代農業見本市」の毎年の見学や「農産物直売所の活性化」というテーマでパブリックコメントも提出した。

トマトの糖度

現在担当している農家のトマトは、大体において少し甘みがあって美味しい。スーパーでのそれは、よくぞこのような不味い味で売れるものだと思うのは私だけだろうか。子供の頃に食べたトマト、20年程前清里駅近くの道端で売っていた形の悪い巨大なトマトは、フルーツトマトといえる味であったことを思い出す。

Science誌の‘12年6月2日号によれば(*)、「市場のトマトの大半が品種改良で『均一成熟』を目指したもので、均一成熟形質のトマトは糖分含量を減少させる」というものである。スーパーでは消費者が「商品の見栄えを第一に買う」から、農家は見栄えをよくして完熟トマトとして売るのである。下表の「トマトの品質条件」は完全着色を義務づけているようだ。

売れるトマトの品質条件 愛知県農業振興基金		
用途	品質要素	品質条件
レギュラー品	色	出荷翌日(店頭)に明るく完全着色、バラツキ解消
	熟度	ロスを発生させない硬さの保持
	食味	糖度6 (min5以上)の確保とバラツキ解消

*Science誌は世界で最も権威がある学術雑誌の一つとされる。

わき芽

ある時、サニーレタスの収穫後の片づけがあった。多少育ちにばらつきを感じはしたが、レタスが沢山の葉をつけている。これをすべて鋏で切断し廃棄処分するのが作業内容であった。

レタスを観察すると、最初の収穫後の株のわきから葉が生えている。これを捨てるのは勿体ないと正直思った。一株として売れないとか、葉の大きさにバラツキがあるので商品として売れないということだろうと勝手に解釈した。

ところが、本屋で立読みしたり、時々買ったりしている『現代農業(’16年5月号)』にタイミングよく「さし芽&わき芽でまる儲け」というタイトルで特集記事が掲載されていたのを見

つけたのである。「わき芽」をinternetで調べると、まだ情報量は少なくブロッコリー・ナス・オクラ・イチゴの「わき芽」の例があるが、葉についての記事は一切なかった。したがって、まだこれから、この分野が有望かも知れないと感じる。

この情報を農家に伝えるつもりである。参考までに、ベビーリーフの現在の国内市場規模は約50~80億円。近年、カットを必要としない利便性で市場が拡大しており、’20年頃には300億円まで成長すると見込まれ、米国では市場規模は約2,000億円だそうだ。(株)日本戦略投資)

収穫祭

昨年末の12月20日に市村農園で市村、小林両農園主及び援農ボランティアが一堂に会し、本年の農作物の収穫を農園主とともに祝い、寛いだ雰囲気の中で交流できる貴重な時間であり、相互の懇親を深めたものと思われる。

この中で竹田さんと私は、少しでも新技術動向に注目して頂きたいとの思いから、昨年10月の「次世代農業見本市」の要点をかい摘んで両農園主に報告した。以下は、収穫祭参加者の記念撮影とその概略。司会進行は竹田さん。



収穫祭参加者の記念撮影

- ・農園主 市村良知、小林茂
- ・ボランティア 竹内、羽尻、西宮、鈴木利、竹田、柿本、渡部敏、牧原、清水、内田、梅沢、八木、鈴木扶、渡辺實 14名
- ・12:00~竹内理事長の挨拶、乾杯と楽しい会食！！
- ・「畑の学校」の閉校報告。来年度からの援農ボランティアの名簿と活動日時を配布。
- ・幕張メッセ「次世代農業展」の感想。竹田さんと渡部が会報の新年号に執筆し、それを渡部が農園主に説明。
- ・市村農園主の庭先に、竹田さんが植えた皇帝ダリアが満開でひと際目立っていた(写真㊦)。(渡部 敏郎)



右上に、皇帝ダリア一輪をズームアップ

フリーマーケット、
自然体験、環境啓発等

府中環境まつり 2016

実行委員長の開会宣言によって始まった「府中環境まつり 2016」。ステージでは市長の挨拶、「環境啓発ポスターコンクール表彰式」と進んでいきます。

一方、当会のブースでは新しくなったポスターやチラシによる会の紹介展示と例年好評の「プラトンボ作り」。

子どもって本当に手を使うことが好きなのです。他のブースでも人が集まっている所はやはり工作や体験ものようです。今年はプラトンボの本体を120個用意したのですが完全制覇！ 全部はけてしまいました。

一人で2個も3個も作る子もいたのですが、午後終わり近くになって、子どもたちが殺到し座る椅子もないほどの盛況ぶりでした。そして、今年は風が強かったのか、中心に両面テープを張っていたのがよかったのか、ほとんどの子どもたちが上手に飛ばしていました(写真⑥)。

プラトンボを飛ばす姉妹



これが
プラトンボ



ごみ減量推進課の職員と
リサイクルのリサちゃん(中央赤色)のコント

今後は、会への興味をかき立て入会へとつなげていけるような案内にも工夫が必要かもしれません。

全体の動きとしては「リサイクル子どもみこしの練り歩き」。農工大生によるエコレンジャーショーや府中東高生物部の「ヒラメの養殖実験報告」、ごみ減量推進課の職員とリサちゃんによるコント(？/写真⑤)等子どもたちが楽しめるステージが続きました。

ゴーヤやアサガオの配布も早くから行列ができるいつもの光景もあります。そして、当会OBたちの懐かしい顔もちらほら。しばし近況報告等をおかわすことができたのも、この催しの利点でしょう。

好天に恵まれた一日でしたが風が強くて土ぼこりが凄いのは閉口でした。しかし、多くの方がサポートしてくれた今年の「環境まつり」も無事終了し、感謝です。

(内田 ひさ子)

平成27年度 府中市委託公園清掃活動の実施状況

現在当会は市内の公園のうち「押立町緑地」、「栄町中央公園」、及び「かわごえどう広場」について府中市から委託を受け、清掃を実施している。当会の運営上、様々な機会をとらえ、収入の増加を目指しているが、なかなか財源となる仕事が見つかっていない。

そのなかにあって、3公園の清掃は大事な業務になっている。各公園の平成27年度の実施状況は下記のとおり。

3公園のうち特に「押立町緑地」は面積が広く、平均の参加者が4.7人では毎回大きな労力が必要であり、会全体での協力を期待している。(高橋和夫)



押立町緑地での清掃

公園名	実施回数	参加人数	平均参加人数	10回以上参加者	公園の面積
押立町緑地	24	113	4.7	5	2798.10㎡
栄町中央公園	24	100	4.2	5	642.80㎡
かわごえどう広場	24	34	1.4	2	234.06㎡
合計	72	247	3.4	12	3674.96㎡

ご冥福を
お祈りいたします

元理事長の大崎 清見氏 ご逝去

さる4月13日(水)に、当会の相談役を務めておられた「大崎 清見さん」が、ご逝去されました。84歳でした。

大崎さんが当会に入会されたきっかけは、平成12年8月に設置された「府中市環境基本計画素案検討会」の公募市民として応募され、運営委員長を務めておられた時に、当会を知り入会されました。

大崎 清見さんのプロフィール

大崎さんは1931年に群馬県の農家に生まれ、日本の農業生産品の増産を果たし、いつの日か、美味しいものを皆が味わえる世にしたいという夢を抱き、群馬県立桐生高校、宇都宮大学農学部に進学し、難関の国立公園管理員の試験に合格。以後、環境行政一筋に歩み、1985年に退官後も、国立公園協会常務理事など、環境に携わる数々の役職を努め、ベトナムの国立公園計画の現地指導も担当されました。

さらに、「日韓自然公園2000年の会」の日本代表、NPO法人府中かんきょう市民の会の理事長やNPO東京セントラルパーク代表監事、東京環境工科専門学校専任講師などを歴任されました。

自然保護の歴史と共に歩まれた一生

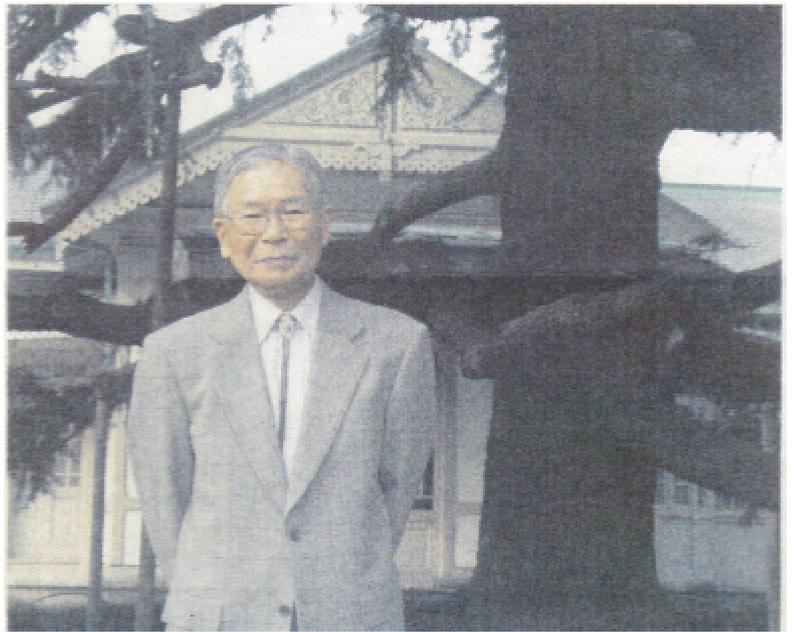
「自然保護」や「環境」の言葉が、まだまだ暮らしと無縁の存在だった頃、大崎さんが国立公園を仕事場に、利用促進のための施設整備や、保全と開発の境界を担う役割に飛び込んだのは、そんな環境行政の始まりの時期でした。現場でたたき上げ、環境庁では保護事業に携わり、後進を育て、皇居の森の管理にも取り組みました。

走り続けて現役を退きましたが、環境が地球規模で語られ、私たち一人ひとり役割が求められる時代になって、「好きな仕事をさせて貰った。社会に恩返しをしなければ」と市民活動や啓蒙事業に精力的に取り組んでこられました。

環境行政のパイオニアとして

大崎さんの写真(右上)の背景にある樹木は、新宿御苑のシンボルであるヒマラヤシダの大木です。うしろの、ちょっと垢抜けた洋館は、明治・大正期に皇族の休憩施設になっていた建物で、大崎さんが国立公園管理員の試験を受けた時に会場となった思い出の場所です。

公園管理員として最初の赴任地は鳥取県の大山です。そして阿寒、霧島。いずれの仕事場も良好な大自然が保たれていて、その迫力に身を洗われたといえます。公園管理は、時代の価値観とのすり合わせが肝心な仕事です。



ありし日の大崎 清見さん。新宿御苑のヒマラヤシダと洋館を背に。洋館は明治・大正期に皇族の休憩施設になっていた建物であるとともに、大崎さんが国立公園管理員の試験を受けた思い出の会場でもある。

環境庁となつてからは自然保護局で道路問題に取組み、さらには関連施設建設で当時の大蔵省との折衝も担当しました。保全と開発、利用促進と抑制。その狭間で調整に奔走した日々でもありました。

皇居の森にも足跡を残す

もう一つ、忘れてはならないのが、宮内庁の管理部庭園課長の頃の5年間です。国立科学博物館が2000年に皇居の生物相調査結果を発表したが、その先駆けてとなったのは、皇居内の樹木を調べた大崎さんの仕事でした。

庭園課長はしばしば昭和天皇のご相談の席に招かれ、気さくに話しかけられた時の、ご下問のメモはノート10冊にもなったといえます。多くは田植えの時の楽しい会話など、大崎さんしか知らない昭和天皇のお姿です。崩御に伴って1年間、深い思いを胸に、祭官の任務につかれました。このようなご功績から、平成15年11月に叙勲され「瑞宝小綬章」が授与されました。

環境問題への市民の関心は、いまでも決して高くはないと感じていた大崎さん。身の回りの出来事が、地球環境とどう繋がるのか、課題は想像力です。ボランティア活動で精力的に励むのは「私は、税金を使って勉強させて貰いました。その恩返しです」と常にお話されていたお言葉が、思い起こされます。

謹んで心からご冥福をお祈りいたします。

○この記事に掲載するにあたり、2006年9月14日に桐生タイムスに掲載されました記事の一部抜粋と、上記写真を使用させていただきました。(前理事長 現相談役 竹内 章)

原発事故
を経て

電気の共同購入

2016年1月に生活クラブ生協のチラシの中に「電気の共同購入」を発見しました。4月から「電力自由化になる」とは聞いていましたが、「共同購入できるの？」と疑問に思い、1月30日に行われた説明会に参加しました。



電気の共同購入のチラシ

共同購入とは

説明会では次のことがわかりました。①生活クラブの電力会社(株)生活クラブエナジーが電気を供給する。②自然エネルギーが基本。生活クラブが所有する太陽光や風力、他から調達するバイオマスなどの自然エネルギーで発電した電気が中心。③情報を公開します。電源構成・発電コストなど情報公開を進めます。④自然エネルギー基金に寄付。オプションとして、毎月の電気料金の5%を、省エネや自然エネルギー推進のための基金に寄付することができます。⑤月々の費用は東京電力と同じ。契約プランは、東京電力の一般的な家庭の契約と同じ、基本料金と3段階料金制とし、電気料金も同額。⑥2月末の事前申し込みは、東京全体で500世帯。申し込み多数の場合は抽選。次の申し込みは6月の予定。

夫に了解を求め、事前申し込みをしました。3月中旬に当選の知らせがきたので、生活クラブエナジーと契約を交わし、6月から生活クラブエナジーの電気を利用しています。

説明会で出た質問は・・・

- ①停電になることはないのか？ 回答:電力ネットワーク全体で電気の品質が保たれるため、電気は安定的に送られます。
- ②スマートメーターとは？ 回答:通信機能があり、30分単位での検針等が可能になる新しい電力量計です。東京電力が設置し、自己負担はありません。

電力自由化とは・・・

今まで電気は水道と同じように、住んでいる土地の電力会社を利用するしかありませんでした。原子力発電は、多量の高レベル放射性廃棄物を作り、それが無害なレベルに達するまで、可能な限り長期間保管しなければならない大変な代物だと知っていました。東京電力の約3割がその原発に由来する電源であることも気づいていました。

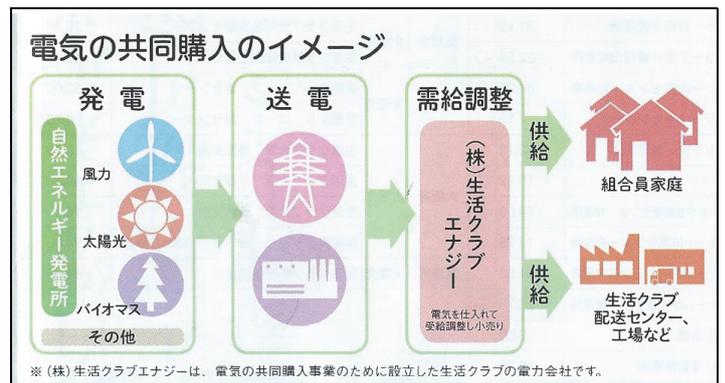
1986年に起きた「チェルノブイリの事故」では、原子炉から大量の放射能が大気中に放出されました。放射能は風にのり、世界各地に広がりました。チェルノブイリから約8000キロ離れた日本でも、野菜・水・母乳から放射能が検出されました。何も知らされないで強制避難させられた人々。放射能防護服もなく、ほとんど無防備の状態です。放射能防護作業にかかわり、亡くなった人々。子供たちに多発した甲状腺癌。放射能に汚染された土地に戻って暮らしている家族は、親は森で採ったキノコを食べるが、「子供には食べさせない」というテレビ番組を最近見ました。

5年前の「東日本大震災」では、とうとう日本で原発事故が起きてしまいました。廃炉にするにしても汚染された地下水漏れが起きたり、原子炉の解体作業が遅々として進まず、除染した放射能廃棄物の処分場問題も難航しています。これから、ますます困難な問題が起きてくることでしょう。

「電力自由化」は、これから先の世代にどのような地球を渡していくのかを考えるよいチャンスです。電力会社を選ぶことで、原発に由来しない電気を利用できます。そのためには、送られてくる電気の発電方法が明確にされていることが重要だと思います。

「今のところ、電源の表示は欧州連合(EU)などのように義務づけられておらず、電力小売りの名乗りをあげた約260社のうち、調達する電力の電源構成を公表しているのは、約3割にとどまっている。だが、食材などの表示も、消費者が商品に関心を持ち・・・要望を積み重ねたことにより、義務化が進んできたのではないかと・・・選べるという事は、商品に対する監視を強め、要望の声を上げるといふ事だ」と、4月1日の東京新聞には書かれていました。

電気共同購入のイメージ図



6月から生活クラブエナジーからの電気を利用しています。発電方法などしっかり把握していこうと思います。また節電を心掛ける暮らしは、以前と変わりません。

昨年10月に見学した「市民共同発電所 小平ソーラー」の元気な方々の顔を思い浮かべて、府中市にも「市民共同発電所」をいう思いが膨らみます。

※参考資料:チェルノブイリ医療支援ネットワーク

(梅沢みどり)